企業

札幌市

裸足で歩けるきれいな砂浜を残したい

鈴木 將之 パタゴニア

取材日 2013.07.19

現パタゴニア札幌北店店長。パタゴニアは「最高の製品を作り、環境に与える不必要な悪影響を最小限に抑える。そして、ビジネスを手段として環境機器に警鐘を鳴らし、解決に向けて実行する」をミッション・ステートメントに掲げている。東日本大震災では石巻市での支援活動を積極的に展開し、その活動は現在も続いている。

パタゴニアとの出会い

前職は建設コンサルタントだが、自分にしかできない事をしたいと思い、パタゴニアに転職した。大学生の頃、サーフィンの雑誌でパタゴニアの意見広告を発見してから面白い会社だと感じていた。

出身地である静岡県久能海岸の砂浜で、小学校の頃に遊んだ記憶がある。少し大きくなってから自転車で行ったら、砂浜が無くなっていた。「えー！そういうことがあるんだ！」と非常に驚いた。その後、海岸に擬岩ブロックを置く事で砂浜を戻すプロジェクトに取り組んだ先生がいて、砂浜に積んである擬岩ブロックに興味が湧いた。大学ではこれについて勉強した。

そうした中、サーフィンの雑誌のパタゴニアの意見広告を見て、擬岩ブロックを置くとサーフィンができなくなってしまうと分かった。「そんな事にも気づかなかったのか！」と衝撃を受けた。アウトドアが好きだし、サーフィンをやりたかったし、面白い会社なので、良い意味で会社を利用したいと思っている。

3月11日　14時46分

仙台のパタゴニアの店舗1階にいる時に地震が起きた。最初は「揺れたな」と思う程度だったが、揺れはとても長くだんだんと大きくなる。1階にお客様はおらず、もう1人のスタッフと一緒に商品の転倒を心配していた。すると4階の休憩室で昼食中のスタッフが走って降りてきた。彼女は取り乱して外に飛び出そうとするので、「何か落ちてきたら危ないから！」と必死に彼女を落ち着かせようとした。揺れが収まり、3階にいたお客様がスタッフと1階まで降りてきた。全員の無事が確認できたので会社に連絡をしようとしたら、電話がつながらない。電気はバチンッと音を立てて停電した。1階は被害がなかったが、3階は商品が落ちてひどい状態だった。お店の隣の公園にたくさん人が集まっていたので、ただ事ではないと

感じた。

その日は明るいうちに帰ろうと判断し、電気が通った時のために火元を確認してから家路についた。45号線を歩いて帰る途中、宮城テレビ放送のビルの電気と信号機がついていたので、自宅は停電していないかもしれないと期待した。家が近所のスタッフと「帰ったら電気つくといいね」と話しながら歩いた。テレビ局の方も情報が無いようで、歩いていたら「どのような状況ですか」と聞かれたのだが、僕達も何も知らないので「歩いて帰るしかなかったので、歩いてきました」と答えるだけだった。

リーダーの重要性を実感

家が福田町にあり、警察や消防が「海岸の方に行かないでください」とアナウンスをしていた。家を見に行ったが、すでに辺りは真っ暗でよく見えない。家がある事を確認して、近くの小学校に避難した。どうしたら良いか分からなかったし、また津波が来る可能性があるので、避難するよう呼びかけられていたからだ。梅田川で真っ黒な水が上下するのが見えた。大学では奥尻の地震について水槽を使って青苗の実験をしていたし、以前は海岸公安の仕事をしていたので、津波に関する知識があった。川底まで見えたかと思ったら、急に堤防ぎりぎりまで水が上がってきたのを見た時、

「これはすごい津波が来たんだ！」と思った。その夜、避難所で携帯電話のワンセグを見ている人達がいて、津波被害を知った。想像以上だった。しかし、僕は意外と冷静に津波の映像を見ていた。小さな携帯電話の画面でしか見ていないので、津波の映像はまったく現実味が無かった。
小学校で2日間を過ごした。人がたくさん押し寄せ、体育館に入りきらなくなり、住む地区ごとに教室へ移動の指示が出されたので、途中から教室へ移った。避難所は食べ物も水もあまりなく、2人でおむすび1個と500mlのペットボトル1本が配られただけだった。それが1日分だ。全然足りなくて、お腹が空いた。そして、避難所はあまり良い雰囲気ではなかった。1日目は犬に、2日目の夜は子どもが泣く事に対して「出てけ！寝られない！」と怒鳴る人もいた。さらに、家が壊れてしまった人と家に戻れる人の間に差が出てきてしまった。食べ物が少ないので家に戻る人には食料を分配しないと誰かが言い出し、「お前らは帰るところがあるじゃないか！」と喧嘩になった。それを見て、僕はとてもいたたまれなくなった。そのあと、別の小学校に行くと、神戸の震災を経験した方がたまたまいたらしく、その方が上手にリーダーシップをとっていた。部屋のドアには避難者の名前を書き、役割分担をして皆が協力する体制が築かれ、避難所の雰囲気はまったく違った。そうした様子を見て、リーダーは重要なのだと心底実感した。

みんなで協力し合った1週間

3日目に他の地区で水が出るらしいと噂を聞いて、自転車で探しに行った。避難所は飲み水も足りない状態で、限界だった。僕はお店の確認も兼ねて仙台駅の方に向かった。すると、街に近づくにつれて、道端で自動販売機のコードを抜いて、携帯電話を充電している人を見かけた。「電気使えますか？」と聞くと「ここは使えるよ」と返ってきて、電気が復旧した事が分かった。お店へ行くと、電気と水が使えた。それから約1週間は他のスタッフとお店で合宿生活をした。とにかく食料がないので、「○○で○○時に売るらしい」という情報を頼りに皆で買い出しに行った。家族がいるスタッフのために、買った物をいったん集めてから分配した。そうした中で、電気と水が使えた事は本当に恵まれていたと感じる。
街は異様な雰囲気だった。セキュリティが鳴りっぱなしで、セキュリティ会社に問い合わせても「手が回らない」と言われた。そんな状況でもお店の商品を勝手に持っていく人がいないのはすごいと思う。被災地の支援に持って行ったのと、物流が止まり新しい商品が入荷しないために商品棚はス

カスカだった。それでも営業したい気持ちが強く、4月頃からは必要とするお客様が訪れたらオープンした。ドアに「電話をくれればお店を開けます」とメッセージと電話番号を書いて対応した。物資が回り始めたのは4月中旬に入ってからだ。
僕は札幌から仙台に単身赴任していた。会社の上司に、子どもの小学校の卒業式があると伝えたら、「絶対に行くべきだ」とチケットを取ってくれ、皆がガソリンをかき集めて福島空港に送ってくれた。だから3月20日頃から約1週間は札幌に戻っていた。北海道は揺れ自体あまり大きくなかったようで、普通の様子だった。その後、仙台に戻ったが、仙台の自宅には3月11日からほとんど帰っていなかった。僕しか住んでいなかったし、一度土足で入ってしまっていた上にひどい散乱状態だったので、また4月に大きな地震があった時までそのままだった。

石巻での支援活動

避難所でお年寄りがとても寒そうにしていたので、お店の物資を提供した。支社長に報告すると、支社長も「何か支援をしたい」と現地に来た。その時の被災地の案内役の息子さんが石巻専修大学でボランティアをしていて、人が足りないと聞いた。それで、石巻に行きたい社員に行ってもらう案が出た。会社として社員を派遣するには社員の安全を確保しなければならない。専修大学の場所ならば、もしもまた津波が来ても、そこまでは来ないだろうと判断された。僕は社員がボランティアに来る前に現場の様子を把握するため、3月末から5月いっぱい石巻に通った。主に住宅の泥出しを行なった。また、5月は自宅近所の岡田小学校の近くにあるボランティアセンターにも行った。
2011年4月、計約50名の社員が「ボランティアインターンシップ・プログラム」を利用して「石

巻市災害ボランティアセンター（石巻市社会福祉協議会）」をベースに活動した。社員は3グループに分かれ、主に家屋の泥出しや清掃活動の支援を行なった。また2011年6月と9月に「ボランティアサポート・プログラム」を利用して、「津波復興支援センター（旧仙台市社会福祉協議会岡田・蒲生地区サテライト）」、「四万十塾：高知リスポンス協会」の2団体から希望の団体を選び、計25名の社員がそれぞれ支援活動を行なった。2012年4月以降はグループで短期滞在する方式ではなく、1名がある程度長い期間キーパーソンとなって「OPEN JAPAN オープンジャパン」の事務局を支えるボランティアに参加している。
人数は多くはないが、会社として有給休暇でボランティアに行けるプログラムを作っていて、現在も支援活動は続いている。

自然の力を100%抑えることは不可能

海の近くに見上げるような防潮堤を作ったら、海が見えなくなってしまう。津波に力で対抗するのはもう無理だと分かったはずだ。防潮堤はもっと地元の住民と行政が話し合って、結論を出してから作るべきだ。作る事ありきで進んでいるように感じる。もっと安い方法でできるはずだし、人が住まないようにするか、逃げるルートを作る方がよいと思う。それに震災後は防災ではなく減災と言われたが、最近はあまり聞かない。津波を100%抑える事はもう無理だと思う。

大震災を振り返って

大震災を経験して、日本人である事がすごくよく分かった。話さないけれど、分かり合うようなところだ。外国だったらおそらくないだろう。自分から言わなければ相手には通じない。日本人としてお互いの気持ちを察しながら過ごした。一方で、そうした日本人としての絆や人とのつながりを試されたようにも感じる。
また、店舗の責任者として自分が試されたようにも感じている。ほとんどのスタッフが東北出身者で、それぞれに異なるいろいろな不安を抱えていたと思う。両親と何日も連絡がとれず、テレビでは実家の近所が津波で流された映像が映り、果たして無事なのか気が気ではない日々を過ごしたスタッフもいる。そうした状況下で、ストアの責任者として彼らに対して何をしなければいけないのかを考えて行動する事は、先々が分からない中で答えを出し続ける事であり、自分が試されていると感じた。

撮影：2011.6.19　宮城県名取市　閖上海岸（EPO東北スタッフ撮影）

きれいな砂浜を残したい

2011年11月には、七ヶ浜町でビーチ開放の式典が開かれ、サーフィンができるようになった。七ヶ浜は車で砂浜近くまで行けたため、早い時期からサーファーがゴミ拾いを始めた。そうしているうちに、地元の皆さんから「浜の瓦礫がなくなってやる気が出た」と言ってもらえたらしい。その取り組みを見て、七ヶ浜町長は「震災で急にサーフィンができなくなり、現在もやってはいけない状況なのは不自然ではないか」とビーチ開放に理解を示してくれたそうだ。
震災後は時代が変わると思った。あれから2年以上が経過し、あまりにも普通に戻りすぎている気がする。僕は海からアプローチして何かしたいと思う。今回の津波で仙台新港の砂浜の幅もずいぶん狭くなってしまった。全体が1mほど沈下したけれど、波の力で砂が戻っているところもある。砂は水質の浄化にも役立っていて、自然環境の中で循環している。見た目は変わらなくても、昨日までとは違う砂なのだ。僕は裸足で歩けるきれいな砂浜を孫の代まで残したいと思っている。